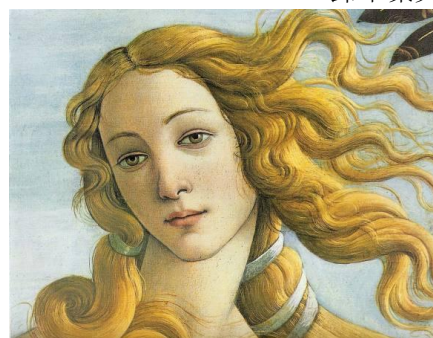


「愛・結婚・離婚のルネサンス：図像学入門Ⅲ」

鈴木繁夫



「恋愛で燃焼し、結婚で子孫と資産獲得、でも離婚は不可能」というのが、16-17世紀のヨーロッパの男女の愛についての考え方でした。結婚は、燃焼する恋愛とはあくまで別物で、子孫を残すための仕組みでした。恋愛と結婚は別目的なので、夫婦互いにわかり合う結婚愛というのは、この頃にはまだ受け入れがたかったのです。また離婚が不可能だったのは、神が夫婦として結びつけたものを、人為的に切り離すことはできないからでした。性格が不一致だから離婚などというのは、問題外でした。とはいえ、産褥などで妻は早死にしてくれるので、離婚をせずに再婚ができました。

このように16-17世紀の男女感覚は、今の私たちの感覚とずいぶんと異なっています。現在の感覚は、過去の感覚のフィルターを通してみると、普遍的にまともだとは言いえないこととなります。恋愛と結婚、そして離婚も、記録に残されているだけでも三千年前もの昔から、人間が経験してきたことですが、これらは時代と共にその捉え方が異なっているのです。

講座では各回、一枚の絵画を中心として、その絵とテーマが関連する他の作品をとりあげて、時間と空間を横断・縦断しながら、皆さんと共に、恋愛・結婚・離婚について考えていきます。恋愛・結婚・離婚の見方について、受講してためになるのではなく、参加してためになる、そういう雰囲気の中かで皆さんと共に講座を進めていきます。

《燃える恋愛》

1. フェルメール「バージナルを弾く女性」：ただ一人への愛？
2. ルーベンス「ヘーローとレーアンデル」：後追い自殺という燃焼
3. ティツィアーノ「ヴィーナスとアドーニス」：片思いの喜び
4. ブルーマールト「アモルとプシューケーの結婚」：隠れる夫と心の成長

《結婚の明暗》

5. ボッティチェリ「ヴィーナス誕生」：花嫁の心得と結婚神ヴィーナス
6. ボッティチェリ「春」：肉体的愛から神的愛へ
7. ルーベンス「パリスの審判」：恋人、愛人、妻
8. ラファエッロ「聖母の結婚」：膨張する母性、消される夫性
9. ジョージ・ガウワー「エリザベス I 世の肖像」：処女と政略結婚
10. ファン・ダイク「チャールズ I 世と家族の肖像」：宗教が違う不幸

《離婚の幸・不幸》

11. ホルバイン「ヘンリー八世の肖像」：離婚できなかった王と毒殺された女王
12. レンブラント「眼をつぶされるサムソン」：妻の裏切り？

- 開講期：10月～3月
- 開講時間：午後3時30分～5時30分
- 開講日：第2および第4金曜日